



## 巻頭言—「まやかしの言論」を見抜く力

アリストテレスは紀元前 384~322 年のギリシャの哲学者です。その著書『ニコマコス倫理学』などの書籍は、倫理学や政治哲学において、いまなお参照される古典として高く評価されています（『ニコマコス倫理学』は高田三郎訳で岩波書店から出版されています）。なんと約 2500 年前の書物です。日本では縄文時代から弥生時代に移行する時期なので、その時代にすでに文字があり、書物として残っていること、そしてそこに述べられていることが、いまでも参照されていることに驚かざるをえませんが、同時に人類はほとんど変化（成長）していないという事実にもあきれながら驚いてしまいます。

マイケル・サンデルの議論も含めて、哲学界においては近年、アリストテレスに始まる政治哲学や倫理学が改めて注目されています。倫理学では、「人間とはどのような存在なのか」、「人はなぜ生きるのか」、「なにが正しいのか」、「人としてどのように振る舞うべきなのか」というような問いに向き合います。政治家や経済人、芸能人などが巻き起こす騒動、あるいは戦争も含めて国際政治の舞台上で繰り広げられている数々の問題は、まさに「倫理」を問う事態であり、「政治哲学」が求められる事態だといえます。

しかし、それらは当事者(間)の問題だとして、片付けてしまうわけにはいきません。なぜなら、特定のだれか(=当事者)の問題だとして、だれかを悪者にしたあげるといふ言動自体が、その問題を自分から切り離し、特定のだれかを「他者化(=悪魔化)」し、自分を「治外法権の場(安全地帯)」に置く行為だからです。SNS などを通じて無責任にも騒いでいるのならなおさらですが、たとえ閲覧しただけだとしても、そのことが投稿者に加担していることもあり得るとすれば、実は程度の差こそあれ、「私たち」自身もその問題の「当事者」であるのです。この巻頭言で「正義(正しいこと)」や「善(善いこと)」をテーマにして、多角的に考えるのもそのためです。

さて、ここで展開しているような議論でさえ、今日では生成 AI を使えば、瞬時にそれなりにまとめてくれます。したがって、だれでも「わかった」ふうのことを言ったり、書いたり、プレゼンすることができます。しかし、それがホンモノか、ニセモノかは「わかる人」には、それこそ瞬時にわかります。

たとえば、学生が卒業論文を書く場合、それが本人が文献にあたり悪戦苦闘しながら書いたものか、生成 AI を用いてまとめたものなのか、おおよそ見当がつかます。ましてやそのことについてほんの少し、雑談程度でも話す機会があれば



なおさらです。アリストテレスを持ち出すまでもなく、人類の“知”の蓄積は、そんなにイージーなものではありません。

「付け焼刃」か「ホンモノ」か、それをごまかすスキルが飛躍的に向上していることは確かですが、だからといって、人が“学び”、そして知性のみならず人格も含めて、“成長”することを AI が代替することはできません。

ある人が“ホンモノ”かどうかは、「まやかしの言論」(田中将人 2025『平等とはなにかー運、格差、能力主義を問い直すー』中央公論新社、pp.6-9)への感度でわかります。「まやかしの言論」とは、物事や概念を自分に都合よく用いることです。あるいはわかっていないことに無自覚であったり、わかっていないのに、わかったふう振る舞うことです。

たとえば「〇〇は△△である」とか、「××すればうまくいく」などと言い切るようなハウ・ツー的、マニュアル的言説は、ほとんどすべてが“ニセモノ”です。物事がそれほど単純でないことは、人類の歴史が示しているからです。むしろ大切なことは、「複雑なものを複雑なまま受け止める力を養うこと」(古田徹也ほか 2025『哲学入門Ⅳ—正義論、功利主義からケアの倫理まで—』NHK 出版新書、p.34)です。そうした答えが出ず、解決できないことに耐え、その曖昧さを受け入れ、向き合う力のことを「ネガティブ・ケイパビリティ」といいます。また、改めてとりあげますが、いま私たちに求められることは、そうした力を養うことです。まさに「美德」と言い換えてもいいのですが、それは「単なる個人的な資質ではなく、共同体のなかでの実践や物語を通じて形成されるものです」(古田ほか、p.170)。こうした観点が「コミュニティアリズム(地域共同体主義)」の思想につながります。

ところで、人類が成長していないのなら、こうしたことを考えること自体が無駄だと思う人がいるかもしれません。そのようなことも含めて次号で…。KCD ラボ代表 松端 克文

## シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋

### 今月のテーマ：行動療法に基づく支援（下）

#### ◆TEACCH プログラム

TEACCH とは、「Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children」の略で、「自閉症およびそれに関連するコミュニケーション上の課題を抱える子ども向けの支援と教育」というほどの意味になる。1972年からアメリカ・ノースカロライナ州で取り入れられ、ASD の本人とその家族を対象とした生涯にわたる支援プログラムとして、診断（アセスメント）、評価、それらに基づく支援プログラムの立案、支援の実施といったプロセスやサービスの総称でもあり、研究に基づく実践が展開されている。

現在は州内を7つのエリアに分けて、各エリアに TEACCH センターが設置され、ASD の本人と家族に対するサポート体制が整えられている。主なサービスには、診断と評価、評価に基づく教育プログラムの立案と実施、不安や対人関係を対象にしたセラピーセッション、トレーニングセミナーを中心にした研修および地域の機関コンサルテーション、ASD に関する研究などがあり、センターを中心にさまざまな機関と連携しながら、自閉症の人たちの生涯にわたる支援を担っていることである（諏訪利明（2023）「TEACCH Autism Program の適用と課題」『発達障害研究』Vol.45、No.45、p.193）。

現在、日本で行われている強度行動障害があるとされる人たちへの支援は、明示されることが少なく、その根拠が曖昧なまま流布している傾向が認められるが、行動療法や応用行動分析学（ABA）、そしてそうした療法を州として取り入れシステム化している TEACCH プログラムの考え方と方法によって立つところが大きい。

よく用いられる「視覚支援」や「構造化」は、TEACCH プログラムの大きな特徴である。「自閉症の文化（Culture of Autism）」という捉え方もそうである。ASD にみられる共通してみられる行動様式を「文化」として捉え理解しようとする発想である。ASD の「脳機能の違いから生じる自閉症の人の認知機能の違いや情報処理の仕方」が違うことから、特有の学習スタイル（認識の仕方）と行動があると考えることで、さまざまな支援方法が見えてくるとされる（諏訪、p.194）。

自身が自閉症者であるテンプル・グランディン（Temple Grandin、1947-）は、その著書（『ビジュアル・シンカーの脳—「絵」で考える人々の世界—』中尾ゆかり訳、NHK 出版、2023。ほかに『我、自閉症に生まれて』カニングハム久子訳、学習研究社、1994）などがある）において、自らの特徴を「絵で考える」ということを述べている。聴覚情報処理が苦手であり、聴覚的な情報を懸命に視覚的情報に置き換えて理解しようとするところがあることや、言葉が理解できる場合でも、相手からの言葉を「字義どおりに理解」してしまう傾向があること、さらに聴覚情報処理には時間がかかるため聞いてもすぐには返事ができず、そのためにかみ合わない会話になってしまうこともある（諏訪、p.195）。こうしたことから TEACCH では、「視覚支援」が重視される。

そして、「予測不能な状態が苦手」という特性をふまえ、「構造化」された環境をつくることが重視される。イラストや写

真で提示したり、自らの意思や感情を表現する視覚的なコミュニケーションの手法は「視覚的な構造化」といわれ、パーティションなどを用いて「作業をする場所」や「遊ぶ場所」など活動エリアを分ける「物理的構造化」、そしてスケジュール・ボードなどを用いた「時間の構造化」などが用いられ、いつ・どこで・なにを・どこまで・いつまでするのかといったことを「構造化」して、支援に適用することになる。

#### ◆TEACCH プログラムをめぐる課題

しかし、TEACCH プログラムは、州としてのある種の制度であり、地域そのものを支援のフィールドとした取り組みであるため、施設や事業所内だけでの実践には限界がある。したがって、家族や学校も含めて、本人の生活する場・地域において実践する必要がある。しかも、人が成長することをふまれば、ライフステージ全体を視野に入れた支援の仕組みづくりが必要となる。

このように TEACCH プログラムの地理的なレベル、あるいは家族や学校といった関係のレベル、さらには人生全体を視野に入れてといった時間的なレベルにおいて、どのように適用するのかという課題とは別に、そもそもの課題がある。

諏訪は次のように述べている。「実践的に発展してきた日本での TEACCH においては、本来は、自閉症の「学習スタイル」をふまえてその部分を補っていくという考え方が先にあるはずなのに、技法のみが独り歩きしてしまった結果、うまくかわることができない周囲の人のために使われるものになってしまった。本来は自閉症の人が周囲とうまくやるために必要な支援であったはずなのに、その部分が失われてしまった。ストラクチャード・ティーチングは「なぜ」「誰のために」実施するのか、ということを従来の構造化の実践者たちは再考する必要があるだろう」（諏訪、p.200）。また、「個別化」に関して、『「一人ひとりに合わせる」という意味での個別化が、『1対1対応』とか『一人で過ごす環境を用意する』とか間違っていて理解されている現場をよく目にする』（諏訪、p.200）というように、個々人の状況に応じてオーダーメイドで支援を組み立てていくことが求められているのに、個々人に「決まった構造化のパターン」をあてはめるようなことをもって、「専門的」と称するような勘違いが生じている。

次のような指摘もある。「構造化の理念をもとにして、子どもたちへの対応を細かく示したいわばマニュアルです。アメリカ人はシステムとして体系化し、マニュアル化するのが上手です。…しかし、マニュアル化の欠点は、ただのものまねに終わってしまう危険性があることです。ハンバーガー店の店員は、客が来たら「いらっしゃいませ」と言いますが、ところがこもっていないかまいません。…それ以上に私が問題だと思うのは、アスペルガー症候群や自閉症の子ども自身をマニュアル化（＝操作対象化）してしまうことです」（（ ）内の加筆は筆者、山崎晃資 2005『発達障害と子どもたち』講談社）。

総じて行動療法的アプローチは、「罰を用いた嫌悪アプローチ」に限らず、外から行動をコントロールして、行動の変容を図るものである。それだけに「本人中心の支援」に真摯に向き合うことが求められる。 KCD ラボ代表 松端 克文

（武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授）  
毎月ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

## シリーズ 障害者支援 超実践！ ⑧

～〇〇のあり方ってどうなん？～

### ◆未来の事を考える。

#### DMN (デフォルト・モード・ネットワーク)

9月、10月は怒涛のごとく日々が流れていたような気がします。神戸市の運営指導、中核的人材養成研修、コンサルテーション、研修、視察、各種会議、事例検討、よろこび荘の運営や支援のことで動き回っていました。忙しくなってくると、ときどき自分が最優先でなにをすべきか混乱する場合があります。実はこういった「いま、自分がなにをすべきか」がわからなくなるのは、私が実践講座で話した「デフォルト・モード・ネットワーク (略: DMN)」が深く関連しています。

#### ■デフォルト・モード・ネットワークの働き

- ①自己認識：自分について考える事
- ②見当識：自分が置かれた状況を把握する事
- ③記憶の整理：自動的に記憶を整理する

実践講座資料 強度行動障害の理解と支援 p27より

このような機能を果たしながら DMN は記憶を整理し自己を省み、状況を把握し、次にすることについて、想像をする決定プロセスのような機能も果たしています。

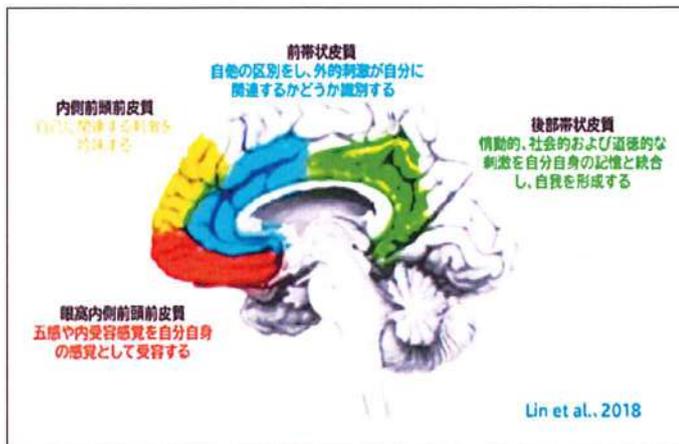


図1:デフォルトモード・ネットワーク(DMN)を構成する脳領域の中の重要な脳部位とその機能 (マインドフルネスの臨床効果と脳科学① 不安やうつ病とデフォルト・ネットワーク 医療法人和楽会季刊誌ケセラセラ vol.111より)

また DMN は、脳の複数の領域がチームのように連携して働くシステムです。この働きは 2001 年に米セントルイス・ワシントン大学医科大学の神経学者マーカス・レイクル氏らによって偶然、発見されました。近年の研究では、脳内のおよそ 60%~80%のエネルギーを消費しているともいわれています。マーカス・レイクル氏も次のような言葉で DMN を表しています。

「The brain is never at rest. -脳は決して休んでいない」

Marcus E. Raichle (2001)

つまり私たちがなにもしていないときにも、脳は自己を省み未来を想像している、ということがいえます。

### ◆私ができること④

DMN はタスク(やること)が過剰に続くと図1のように複数の領域の連携を必要とする DMN へのリソースが足りずに、私の状態のような「いま、自分がなにをすべきか」がわからなくなることがあります。私は混乱すると、この DMN に思

いを馳せながら過去のカレンダーを見て、してきたことを確認するようにしています。そうすると明日、来週、来月、今年度、来年、未来の為に私のできる事がひらめく・わかる 때가あります。ASD の方と脳の仕組みは違いますが、実体験をもって時間の構造化ツールの必要性を常日頃から感じています。

### ◆超実践！② アンサー編

#### ①放課後等デイサービスを利用している A さん

- ・荷物入れの棚の上へ上がってしまう
- ・危険な事を伝えても「伝わらない」

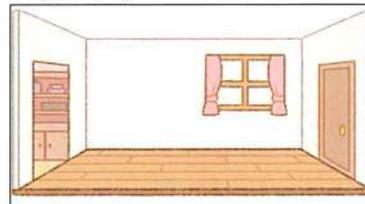
#### ②食事の時間に他のご利用者の食事を食べてしまう B さん

- ・食事量を増やしてみても同じ行動

まずは A さんの検討をしてみます。このようなケース、皆さんの施設にもありませんか？よろこび荘にも、本来想定されていない空間（廊下のくぼみ、隙間、机の上など）で過ごす方がいらっしゃいます。

共通して言えるのは、「それ以外の過ごし方」が示されていないということです。たとえばイラスト1を見てください。

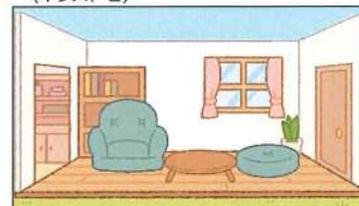
(イラスト1)



あなたはこの部屋に案内されて「どうぞ」と言われました  
あなたは「どこ」に座りますか？

「端っこ」や「真ん中」など、曖昧な指示では人それぞれに「ここかな？」が生まれ、無意識に座る場所を探すことになります。(そしてそれは正解？合ってる？という不安)では次にイラスト2を見てください。

(イラスト2)



あなたはこの部屋に案内されて「どうぞ」と言われました  
あなたは「どこ」に座りますか？

これはどうでしょうか。きっと皆さん、座椅子か丸クッションに座るのではないのでしょうか。また本棚やテーブルも置いてあり「なんとなく過ごし方を想像しやすい」と感じませんか？ A さんには、こうした「居場所感」や「空間的なわかりやすさ」が十分に示されていたでしょうか。

ASD の方々は「自分の場所、過ごし方が分からない」ことで不安になりやすく、他者との境界など想像で補うことがむずかしいです。A さんにとって荷物入れの棚に上がる行為はそれらが「示されていないから仕方なくそうしている」のかもしれない。また「危ないよ。降りてください。」も「(なにが、どう) 危ないよ。(なぜ、なんのために) 降りてください(それからどうする)」など具体的に示す必要があると思います。B さんにも同じような配慮として「あなたの食事はここからここまでですよ」という範囲や、ルールの視覚化が必要かもしれません。ASD の方々が正しく情報を受け取りやすい環境を整えることが、安心と行動の安定につながります。

(よろこび荘 大谷健太)

## ～長春(中国) 第三幼稚園 視察報告～

今年も、長春師範短期大学と神戸親和大学との幼児教育共同プロジェクトで、集中講義を行ってきました。

期間中、視察に伺った第三幼稚園について報告します。

\*ご報告にあたり、第三幼稚園および長春師範短期大学より、ご報告と写真掲載の承諾をいただいております。

### ◆「第三幼稚園」について



「第三幼稚園」紹介パンフレットより転載

長春市内にある第三幼稚園は、中国政府が設立した公立幼稚園です。幼稚園の広さは、東京ドームぐらいの約4万平方メートルです。公立幼稚園は、第一幼稚園から第五幼稚園があり、約1000人の幼児が利用しているそうです。中国は、幼稚園の公立化と無償化を推進しているとのことでした。

幼稚園入り口のセキュリティは万全で、複数の警備員が配置され、正門は施錠されています。幼稚園正門から園舎正面入り口までのアプローチは広く、植樹された木々や植物等も手入れされていました。園舎入り口まで、幼稚園の理念や教育内容を表現する彫像等が設置されています。



第三幼稚園正門から園舎正面入り口までのアプローチ

### ◆発表ステージと展示作品

園舎に入ると、子どもたちのさまざまな作品の制作場所があり、コーナーごとに子どもたちが作り上げたたくさんの作品が展示されていました。

視察をした当日は、各コーナーで作品の制作者である子どもたち自身が、制作過程の様子や工夫等の説明をしてくれました。



発表用ステージや子どもたちの作品



### ◆ICT 活用した遊び

ICT を活用した遊びも取り入れられており、子どもが描いた魚を映像にし物語にしたものや(写真左)、床に投影された風船の画像を走って割る、という遊び(写真右)がありました。



AI による物語投影と風船割遊び

### ◆生き物（鳥、水中生物）との触れ合い

園舎内には、世話や観察を通して、鳥や水中生物と触れ合うことができる場所があり、まるでミニ動物園やミニ水族園のようなコーナーになっていました。



鳥や水中生物のコーナー

### ◆偏らないトータルな体験の提供

先ほどの作品展示でも紹介したように、この幼稚園では遊びの体験から園児自らがさまざまなことを学べるような環境を提供しています。偏ることなく、あらゆる分野を取り入れ、本格的に学べる場が設けられていました。

運動遊びでは、建物内には室内用水遊びの部屋、梯子やボルタリングの部屋、バランス遊びの部屋等(下図写真参照)、外には遊園地のような乗り物が乗れる場所や本格的なアスレチックが設置された場所や一輪車や自転車が存分に乗れるコース等が設けられています(前頁パンフレット参照)。



水遊び、梯子、ボルタリング、バランス遊びの部屋

### ◆音楽室や影絵、科学スペース

さまざまな楽器が揃えられ防音が施された音楽室や、中国文化にある影絵を制作し演じるコーナー、科学を体験するスペースなども園舎内にありました。



音楽室(上左)、影絵コーナー(上右)、科学体験スペース(下)

### ◆園庭の活動

ごっこ遊びとしてさまざまな職業が体験できます。



さまざまなお店と各職業・キャラクター用衣装

### ◆学べる環境設定と最新の支援研究

園児たちがさまざまな遊びに没頭し、自ら学べる環境の工夫が見て取れました。

また、最後の質疑応答のなかで、環境設定には、次の7項目に留意されていることがわかりました。

①活動を部屋やコーナー等で分けている ②活動後の完成形が分かるように完成した作品を展示している ③作成過程を写真等で掲示している ④園児が実際に触れたり体験したりできる位置にある ⑤(園児が取り合いをしなくてもいいように)十分な数を用意している ⑥安全面に配慮して事前の打ち合わせで人員配置を施している ⑦世界各国の最新の知見を取り入れ、日々アップデートしている

このような、先生方のたゆまぬ日々の取り組みがあるからこそ、園児たちが生き生きと活動ができているのだろうと感じました。  
(連カン室 高畑 英樹)

## ちょっといいですか？大西ですけど…

－ 生きていだけで価値がある社会－

### ◆演説会で感じたこと

先日、某国政政党の党首が私の住む街（神戸市ではありません）にやってきました。いわゆる政党の演説会です。私自身、政治家の講演や演説を聞くことが好きですので、休日ということもあって迷わず参加しました。演説のなかで、党首自身がどのような社会（日本）を目指していくのかについて話がありました。「すべての人が生きていだけで価値がある社会」にしていきたいというのがその答えでした。これに共感を覚えました。「この世に価値のない人はいない、障害があっても必ず生きていく役割と価値はある」と、このページで幾度も書いてきました。この自分自身の考え方と重なっているところがあるような気がして、思わず拍手を送ってしまいました。別にこの政党を推しているわけではなかったのですが、変な親近感を持ちながら会場を後にしました。

いまの世のなか、生産性があるかないか、あるとすればその生産力はどれくらいなのか等を基準に人の価値が決められがちです。国の予算をみてもその考えが見え隠れします。障害という分野に割り振られる予算をみれば、本当に人として生きていくことを保障しようとしているのか疑問を感じます。人が生きていくとはどういうことなのか問いたくなりますね。

### ◆良い支援とは

福祉の仕事は、この党首がいう「生きていだけで価値がある社会」を創造していくための一翼を担っているといえます。特に障害という分野には大きな役割が与えられているような気がします。

良い支援を提供することで、その人の価値が引き出され、提供し続けることでその価値は輝き始めます。良い支援の内容については、あれこれと議論がありますが、少なくとも、その人の存在を否定するような言動は論外です。良い支援は、良い人と良い環境からしか生まれません。良い人を育て、良い環境を創造していくことが、福祉分野、特に障害の分野においては重要な目的です。そこにお金と労力を投入すべきだと思います。

近年、強度行動障害の方をはじめ重症心身障害のある方等、以前は支援がむずかしいと言われていた方々への支援に取り組む人が増えてきました。重い障害があっても生きてい価値があるということに気づいた結果なのではないかと思います（個人の推測ですが）。いずれにしても、このような取り組みは、価値のある人生への第一歩につながっていくのだと思います。（大）

## 陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、2025年の9月から68年目に入りました。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

### ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

### 陽気会のホームページ リニューアルしました

編集委員会：松端 克文  
大西 博之・朝日 満子  
大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: [kcldlab@youkikai.or.jp](mailto:kcldlab@youkikai.or.jp)

